



# 東進入道路建設に伴う発掘調査概要

(市道一秋永、中瀬古、郡山線)

1981・3

鈴鹿市教育委員会

## I はじめに

東進入道路は、県道上野・鈴鹿線より秋永・中瀬古町の南側を通り、団地北東部に接続する約 1,000m のもので、本調査概要はこの内、関連公共事業区間 500m の調査をまとめたものである。調査該当区域は、中瀬古町を中心としている。

進入路建設予定地には、周知の遺跡の中瀬古南遺跡（市町村番号 601）が所在し、多数の土器片の散布が認められるところから、市教委と事業担当課の土木課と遺跡の取り扱いについて協議がもたれ、その結果、市教委が土木課より調査費用の執行委任を受けて発掘調査を実施することになった。

調査の方法は、道路センターを中心に原則的には 20m 間隔に 4 × 4m の試掘坑を設定し遺構・遺物の確認を行った。また、特に遺構・遺物の密度の高い箇所については、道路中まで面積を拡げ本調査を実施することにした。

最終的には、試掘坑 18 箇所、本調査対象地区三箇所であった。

調査工程は、昭和 55 年 12 月 11 日～ 23 日まで試掘調査、本調査は昭和 56 年 1 月 6 日から開始し、写真撮影・遺構実測を含めて 1 月末日をもって全てを完了した。

調査、遺物整理は、教育委員会社会教育課中森成行が担当した。

表紙写真は、中部電力四日市送電所の提供による。

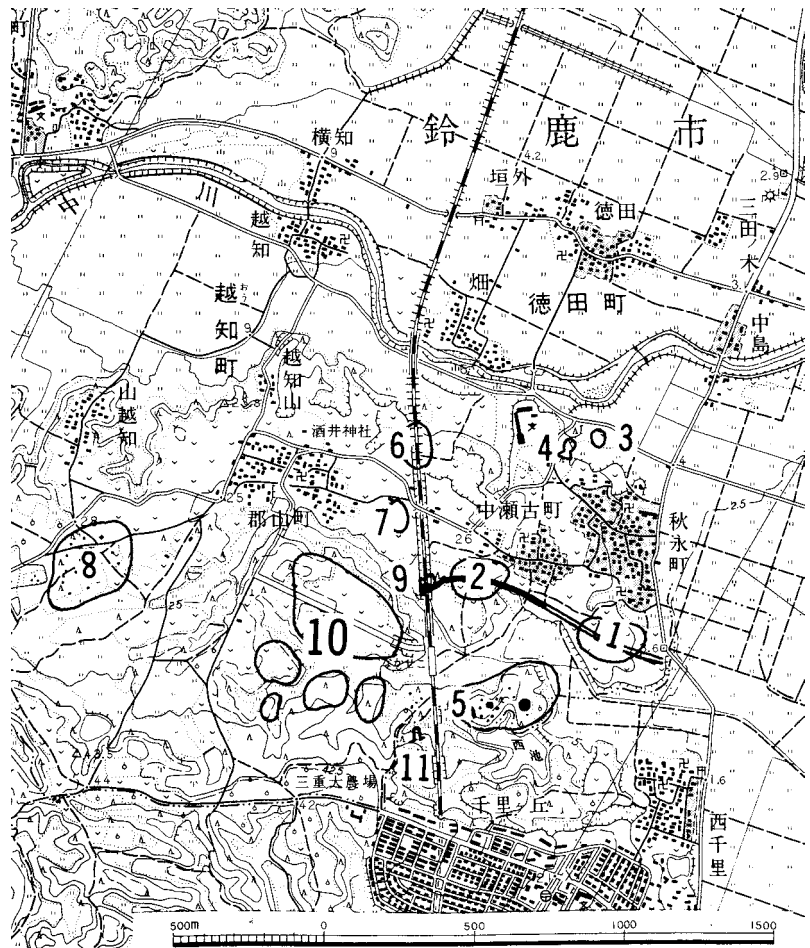
## II 周辺の遺跡

郡山・中瀬古・秋永町にまたがる広い台地（標高約 20m）は、中の川の河岸段丘によって形成されたもので、台地の東には、伊勢平野につながる中の川の沖積平野が広がり、南には、樹支状に発達した浅谷が郡山の奥地まで延びている。この台地には、古代集落跡として、国鉄伊勢線建設の際調査された畑遺跡（6）をはじめとして、今回の東進入路建設に伴い調査対象となっている中瀬古南遺跡（2）、大門遺跡（1）などが所在する。いずれも、弥生時代後期～古墳時代前期が中心である。

古墳には、明治時代三角緑神獣鏡が出土したと言われる赤郷塚（3）、畑遺跡と同様に、伊勢線関係で調査され粘土槨主体部を有した帆立貝式の経塚古墳（9）、半壊の前方後円墳（赤郷 2 号墳）（4）など前期古墳が所在する。また今年の北進入路調査では、塚腰遺跡（7）から、古墳時代前期の方形周溝墓 2 基が検出されている。後期古墳の群集墳としては、円墳では市内第 2 の規模を誇る茶白山 1 号墳を筆頭に 21 基の茶白山古墳群（5）、西方には 46 基の大野古墳群（8）が知られている。またこれより奥地の舌状台地にも古代集落跡、古墳、古窯跡（11）の存在することが現在も調査継続中の郡山遺跡群（10）の調査で明らかにされている。こうした多数の集落跡、古墳群、古窯跡に恵まれた歴史環境は「郡山」と言う地名が示すように律令社会における奄芸郡衙成立の重要な要因となっている。



調査風景



付図1  
周辺の遺跡



付図2 発掘調査地点の位置図

### III 遺構・遺物

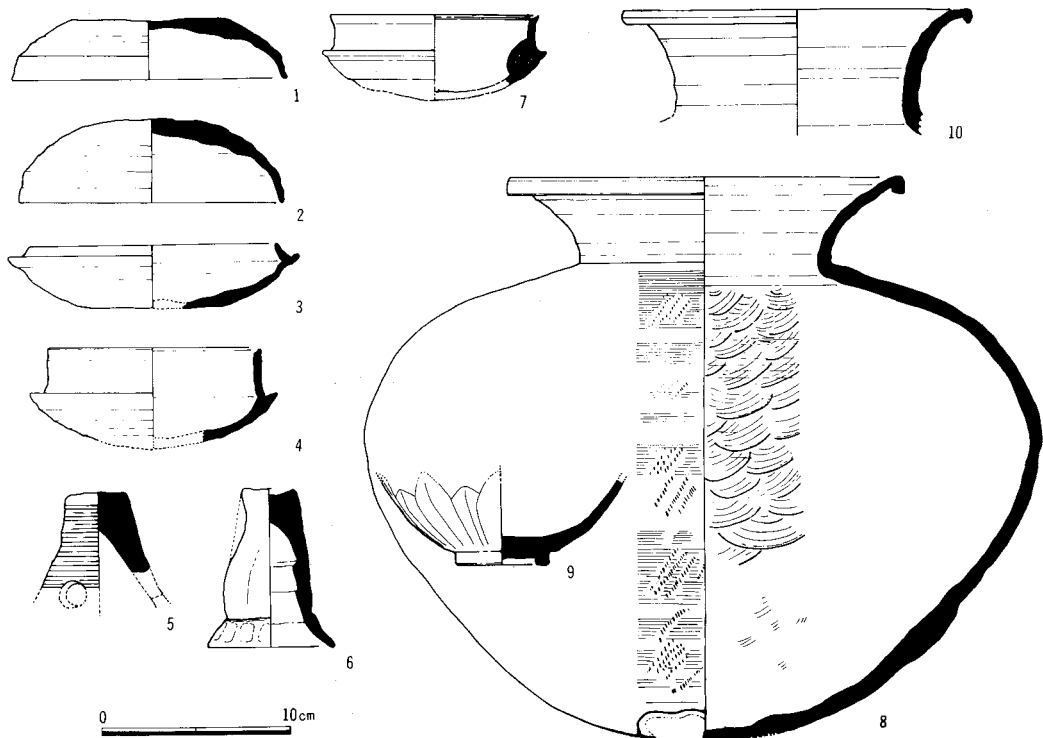
試掘坑は、西から東へ緩やかに傾斜する台地南面に沿ってあり、現況は畑地が主で一部山林も含んでいる。台地の直ぐ南は、巾 30～40cm の浅谷が入り込み、水田として活用されている。遺構は、全体に表土下 15～20cm で検出され、耕作等でかなりかく乱されている箇所が多かった。遺構Noは、I 地区は 100 番台、II 地区は 200 番台、III 地区は 300 番台を与えることにした。

#### — I 地区 —

試掘坑No. 2 から須恵器片がまとまって出土したことからNo. 2 - No. 3 の間を本調査の対象地区とした。

検出された遺構には、竪穴住居址、掘立柱建物址、土壇、溝址などがある。

竪穴住居址 (SB101) の一部が、発掘区の西南隅から見つかった。1 辺が 6m、その周囲には巾 20cm の細溝が巡るもので、おおよそ 6×6m の方形プランを呈する住居址と考えられる。付近は茶畑のためか、かなりかく乱され、住居址の床面と旧地表との差はなく平坦である。周溝内、表土からは、土師器片のみで須恵器が出土しなかったことから、須恵器が製作される以前、古墳時代前期頃に位置づけられるものと思われる。炉の位置は、発掘面積、排土の関係から全体を掘ることは出来ず明らかにはされなかった。



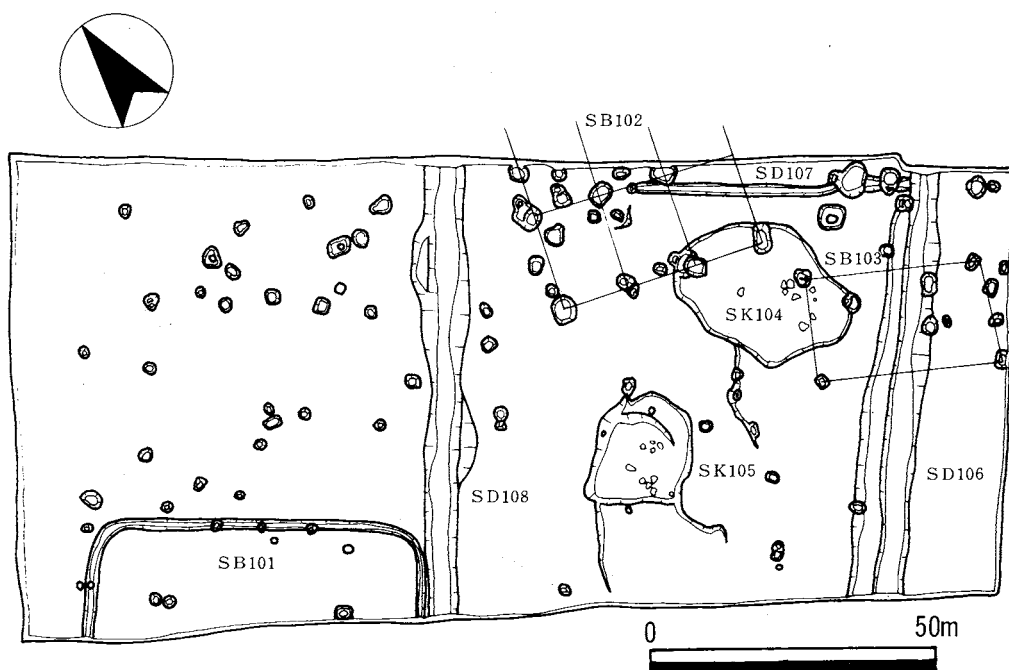
付図3 出土遺物実測図 (1:4)

掘立柱建物址 (SB102) の一部が発掘区の北東隅で見つかった。東西棟で桁行3間、梁行2間以上と考えられる総柱建物である。柱穴の径が30～40cmとこの地区内で一番大きく、6世紀前半頃の須恵器片(付図3-7)が出土している。その東側には、SB102とは棟方向が違う1間×1間の少しゆがみを持った建物址(SB103)がある。柱穴は小さく、遺物は出土しなかった。

土壙(SK104)は、2.5×1.5mと不正形なプランを呈し、深さ10cmと非常に浅い。この土壙内より、こぶし大の礫数個と須恵器の甕(付図3-8, 10)、土師器片が出土した。

土壙(SK105)は、1.5×2.0m、深さ20cmとやや方形に近いプランを呈するもので、SK104と同様にこぶし大の礫数個のほかに6世紀後半頃の須恵器杯身(付図3-2)、焼生品の杯蓋身(付図3-1. 3)6世紀前半頃の須恵器の杯身(付図3-4)、土師器の高杯(付図3-5. 6)が出土した。二つの土壙が重複していたものと思われる。

溝趾(SD106、108)は、発掘区の中央部と東端部にあり、巾は東端部110cm、中央部50cm、深さはいずれも30～50cmである。埋土は砂質性に富んだ暗褐色を呈し、他の遺構の埋土とは性格を異にしている。両者とも遺物は検出されなかった。畑の地割の方向と一致している。その他、遺構には伴わないが青磁碗(付図3-9)、山茶碗片が数点出土している。

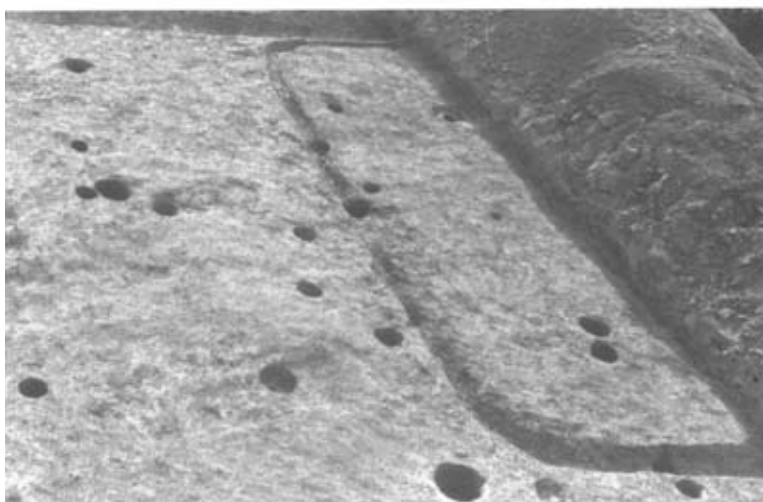


付図4 第I地区遺構平面図(1:100)

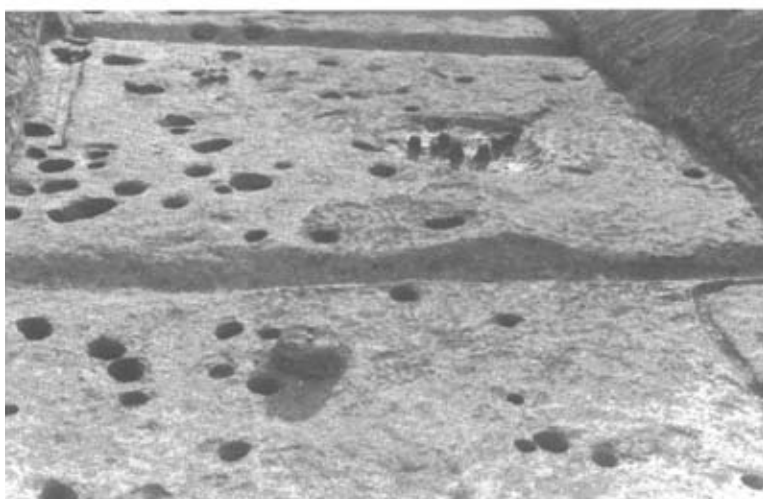
第Ⅰ地区西より



竪穴住居址



掘立柱建物址  
土 壙



－ II 地区－

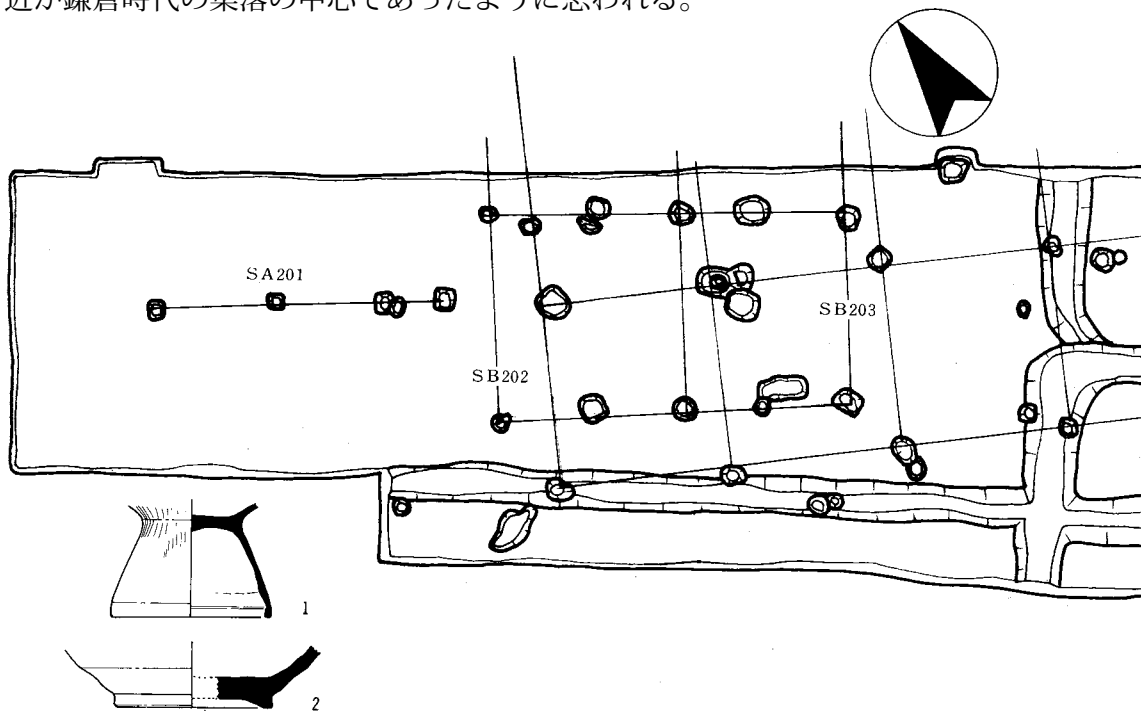
試掘坑No. 9 より、溝址、柱穴多数検出されたことから、No. 9－No. 10 の間を本調査の対象とした。

検出された遺構には、掘立柱建物址、柵址、溝址などがある。

掘立柱建物址（SB203）の一部は、発掘区の中央部より検出された。梁行の規模は不明であるが桁行6間と大形の総柱建物址である。柱穴は小さく、深いのが特徴である。表土・柱穴内より山茶碗片（付図6－2）が出土している。またSB202と西側部分で重複して梁行2間、桁行不明の小形総柱建物址（SB202）が北に延びている。

柵址（SA201）は、発掘区の西端部にあり、方形で小さい柱穴がSB202と向きを同じくして東西に並んでいる。柱間が1.6m+1.4m+0.7mと不規則であるが、付近に建物としてまとまる柱穴が見当たらないところから柵列とした。反対に発掘区の東端部に方形の掘形を持った大形の柱穴からなる柵列（SA207）がSB203とほぼ方向を同じくして南北に並んでいる。柱間が約1.2m等間である。この付近は、かなり削平され柱穴の深さも5～10cmと浅く、遺物は検出されなかった。

溝址（SD204、205、206）は、南側で1つにまとまっている。中央のSD205からは、小礫5～6個と古式土師器片（付図6－1）が出土している。住居趾の排水溝とすれば、北側の未発掘部分に古墳時代前期の竪穴住居趾群が想定できる。試掘坑No. 7 より、同じ性格を持った溝址が検出され多数の土器片が出土している。この付近が鎌倉時代の集落の中心であったように思われる。



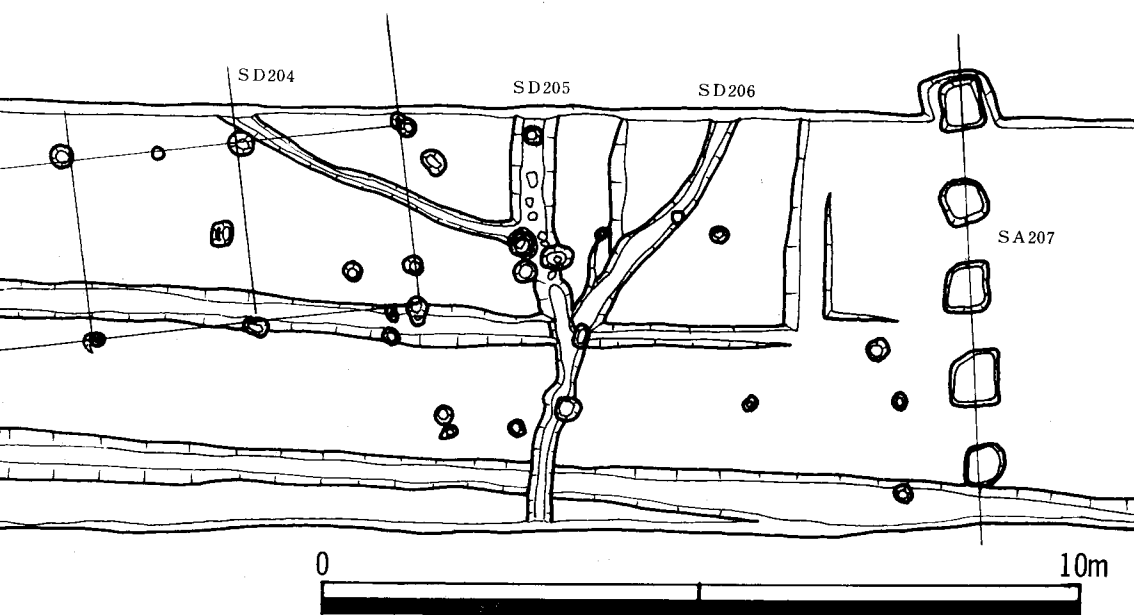
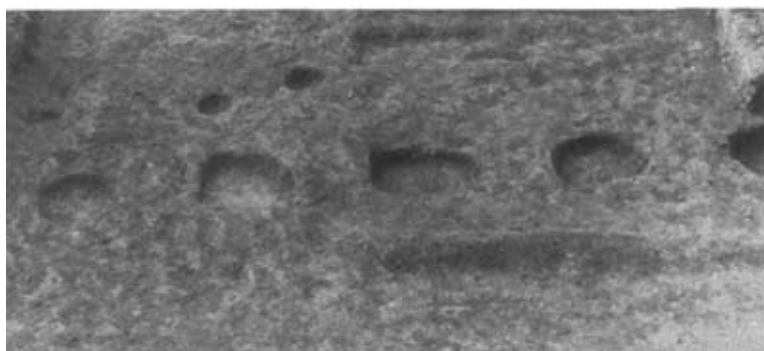
付図6 出土遺物実測図（1：4）



第II地区西より



柵列



付図5 第II地区遺構平面図(1:100)

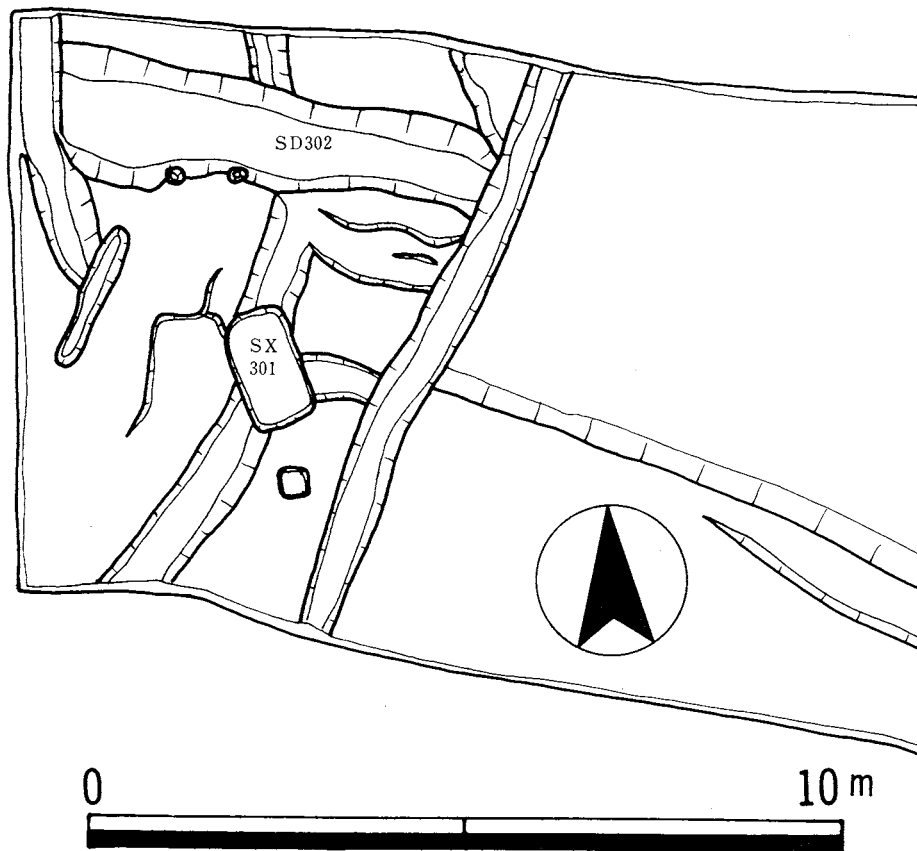
— Ⅲ地区 —

試掘坑No. 16 から土壙墓が検出されたことから、No. 15 — No. 16 の間を調査の対象とした。検出された遺構には土壙墓、溝址、井戸址などがある。

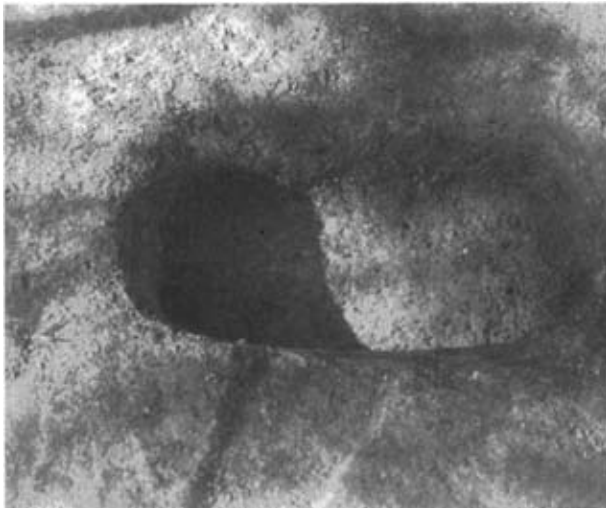
土壙墓 (SX301) は、 $1.7 \times 0.8\text{m}$ 、深さが  $50\text{cm}$  と隅が少し丸い長方形プランを呈するものでほぼ南北を向いている。土壙内、北隅より土師器皿 5 枚 (付図 7 — 2、3、4、5、6)、土師器一皿で囲む格好で青磁碗 (付図 7 — 1) 1 個が検出された。青磁碗は青白色を呈し、内面に劃花文が描かれている。埋土は、砂礫を含んだ黄褐色のもので、鎌倉時代中頃の山茶碗片が若干混入していた。この地点は、経塚古墳から約  $60\text{m}$  の所に位置する。

井戸址 (SE303) は、径  $1.5 \times 2.0\text{m}$ 、素掘りのもので、 $4 \sim 5\text{m}$  掘ったが底には至っていない。上面より、 $1 \sim 2\text{m}$  の所で山茶碗片、常滑甕片が多数出土しているが、埋土が新しく感じられ、また、付近には、水田への給水のための野井戸が多数存在することから、これもその可能性が考えられる。

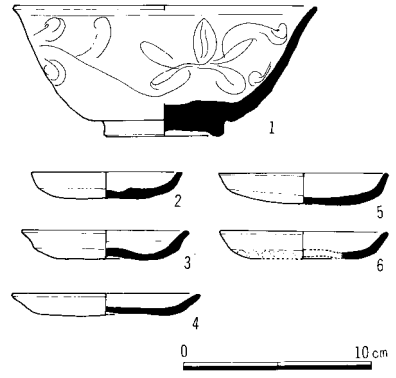
溝址は数条検出されたが、遺物が検出されたのは、SD302 のみで、その主なものは、山茶碗、常滑甕片であった。



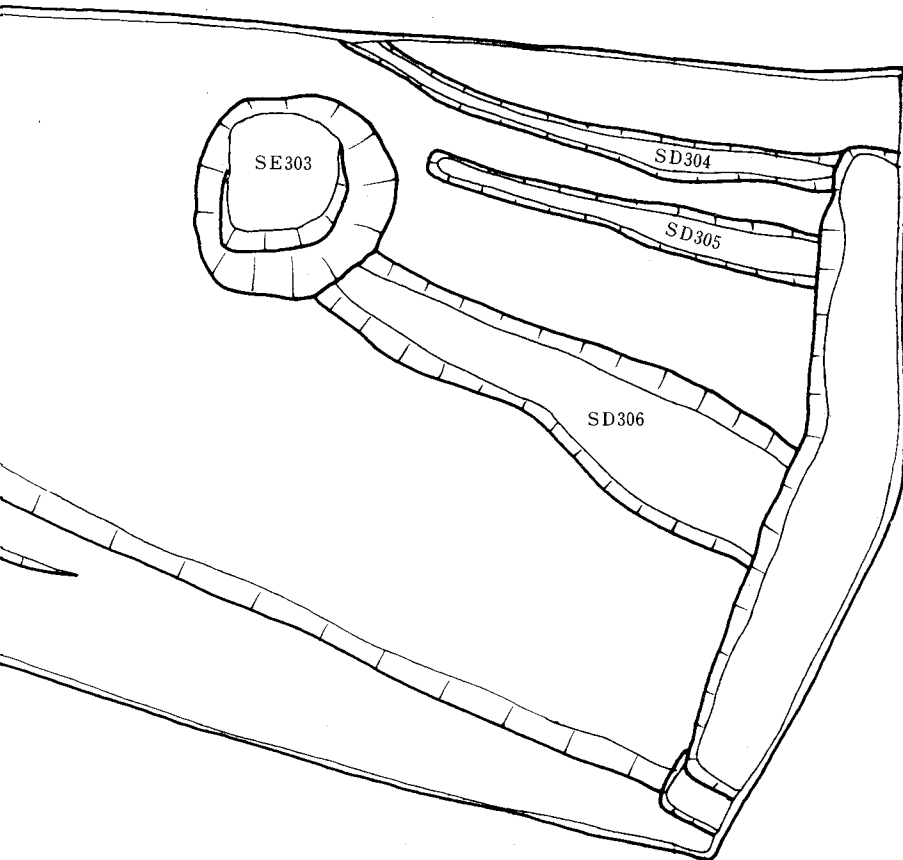
付図 7 第Ⅲ地区遺構平面図 (1 : 100)



土壙墓



付図8 出土遺物実測図（1：4）



#### IV 結 語

調査地区は三箇所と限られていたが、多数の遺構・遺物を検出することができた。遺構・遺物を時代別にながめて見ると、須恵器が製作される以前すなわち古墳時代前期と山茶碗、山皿を日常雑器とした鎌倉時代のものが目立った。東進入路、秋永地区大門遺跡の調査、北進入路調査の塚腰遺跡においてもほぼ同じような結果が明らかにされている。このことから、この地域においては、弥生時代後半～古墳時代前期にかけ、中の川低湿地を望む台地縁辺部を中心に集落の根拠があり、郡山遺跡群の盛時である古墳時代後半～奈良時代にかけて、ちょうど須恵器の大量生産が始まる時期に集落の拡大が進み、山間部の舌状台地深縁部まで開拓が行なわれるようになったものと思われる。

鎌倉時代の遺構は2箇所に認められたが、SB202の大形総柱建物、SX301出土の中国から輸入された青磁碗等から、この付近に相当大規模な鎌倉時代の集落が考えられる。自然湧水をもとに、小浅谷を生産基盤としている丘陵・奥地の舌状台地にみられる小集団とは異なり、存続期間は長かったものと思われる。郡山遺跡群の集落が鎌倉時代中頃を境にして消失するが、生産基盤の違いが大いに原因しているものと思われる。

地 域 時 代	中の川低湿地を望む台地縁辺部	奥地の丘陵・舌状台地・郡山遺跡群
縄文時代		・追谷縄文遺跡 ・末野A住居址
弥生時代	・畑遺跡	
古墳時代	(前) ・畑遺跡 ・松山遺跡 ・大門遺跡 ・中瀬古南遺跡	・塚腰遺跡(方形周溝墓) ・赤郷古墳 ・経塚古墳
	(後) ・塚腰遺跡	・末野古墳(旧地表) ・西高山B遺跡 ・西高山A・C遺跡 ・茶臼山古墳群 ・大野古墳群 ・西高山古墳群 ・末野古墳
奈良時代	・奄芸郡衙(推定)	・末野B遺跡(廂付建物) ・末野A遺跡
平安・鎌倉時代		・末野B遺跡(四面廂建物) ・末野A遺跡(井戸址)
	・塚越遺跡 ・中瀬古南遺跡(土壇墓)	・末野C遺跡

付表9 周辺の遺跡年表